

冬季能古博物館だより



中村光雄氏、山田博氏寄贈 碩末隆志撮影

カイダコ(アオイガイ)「朝日百科・動物達の地球」より 写真=楚山勇氏

タラ?

それとも貝?

アオイ貝のふしぎ

冬の季節風が強くなり、水温が下がる頃に能古島の西側の海岸、白鳥崎から小波戸崎あたりの海岸を散歩すると、時折それは美しい白色のさざ波状の線のはいつた貝をみつけることがあります。この貝は「アオイガイ」と呼ばれ全世界の熱帯、温帯海域の表層に分布しており、黒潮にのって、時には枝わかれした対馬暖流にのって日本海に運ばれてきます。能古島の人々に、この貝の話を聞くと島の渡船場から向かって島の右側、北浦あたりの人々は「そげな貝は見ただこたなかあ」「戦争ん時、外地で見たこたあばってん」「若か時から漁ばしようばってん、いっぺんも見ただこたあなか。能古にやあおらん」等々。ところが反対側、つまり渡船場から向かって左側、西の海岸近くの人々に話を聞くと、なにやらゴソゴソと押入れの中からビニール袋を持ってきて「これな」とガラガラと畳の上にアオイ貝がでてくる。玄関に飾っている家、新聞紙にくるんで「ありやあどこ置いとったかいな」という人等々。美しいが見なれた貝

殻の様です。周囲12kmの一日でまわれるこの島は小さくもあるが大きくもあり、外海側と内海側、東側、西側の海に面している場所によつて自然はまったく違ったものを見せてくれます。「海ん中でくさ、なんかゆらあーゆらしようと、何やらかと思うてくさ、ようと見たら貝ん中に蛸の入って泳ぎよう」と「いんや。貝の身は蛸が食いよつたい」「ちがあ、蛸見て言うと。蛸に似とうけん」「なんのくさ、蛸がくさ、貝殻ん中に住んどつたい。貝にくさ、入りきらんごとなつたらタコツポに入るつちやるもん」等々、ワイワイガヤガヤその内お酒もタコツポ(注1)のことくはいり「干してくさ、スルメにしたらうまかるや」…夜も更けました。

軟体動物門貝殻亜門頭足綱二鰓亜綱ハ腕形目???に属する軟体動物のうちのひとつでカイダコ類、アオイガイ科、アオイガイ。その貝殻はとて薄く、美しくその殻の材質を紙にたとえて英語ではペーパーノールス(紙のオウムガイ)と呼ばれています。日本では二つの殻を向か

能古博物館だより

い合せて並べると葵の葉によく似た形になることからその名があります。別名をカイダコと言いますが、ふつうアオイガイという時はその殻を指し、中身の方はカイダコと呼ばれているようです。カイダコの雌は、ふつう海の表面近くをまるで貝殻を船にしてそれに乗っている様な姿勢で浮遊しているそうです。このカイダコ類は、みなノミの夫婦で、この雌も体が大きく、成長すると約30cm近くにもなり、この貝の中で卵が孵化する迄浮遊しながら保護します。一方、雄は殻をもたず、その体は雌の20分の1、約1.5cmほどで、普段はどの様な生活を送っているのか、よくわかっていないようです。誰やら似ている様な気が……。雄は始めから交接腕(注2)に精子を包んだ袋のようなものを持っており雌に出会ってこの腕を雌の外殻膜の中に入れたら、その腕を切り離して雌の体内においできます。が、19世紀頃迄、あやまつてこれを寄生虫だとみなし新種としてヘクトコチルス・オクトポデイス「タコにとりついている百疣虫」と呼ばれていました。百疣虫ひゃくよくちゅう!!

先ほどから貝殻と言ってはいます。が実はこれ、雌の石灰質の分泌物で貝殻のようなものを作っているだけ

で、貝殻ではありません。破損すると小さな穴ならば貝自身が分泌物を出し修繕します。冬の季節風の吹く頃、能古島の小磯のむこうへ足をのばしてみてください。ちょうど障子の穴に小さなふせがあるようなアオイガイを見つけた事ができるかもしれません。(スルメにはしません。ぜひ一報下さい。)現在、泊秀治氏(元少年科学文化会館指導員)が能古島のまわりをせつせと歩いて、いろいろな貝類を採集して下さっております。八月には、この貝類を当館に展示致します。もちろんアオイガイも展示いたしております。ぜひ御来館下さい。

注1 タコツボ 蛸を捕えるのに使う素焼のつぼ。なわをつけて海底に沈め夜、蛸が中にはいつたところを早朝引きあげていけどりにするがこのツボの底には海水がぬける為の穴があいている。

注2 交接腕 頭足類は交尾を行なわないうで雌が精子の詰まった精莢(精包)を雌に渡す、この精莢を渡すために変形した一本の腕を交接腕という。

●「泳ぐ貝・タコの愛(軟体動物のふしきな生態)」 奥谷高司 著

●「世界文化生物大図鑑(貝類)」世界文化社

●「貝の写真図鑑」ピーター・ダンス 著

●「世界大博物館鑑 別巻2・水生無脊椎動物」 荒俣 宏 著

●「朝日百科・動物達の地球」久保田正 著
奥谷高司 著
右記すべての本を参照させていただきました。

能古島の伝説

おさよ ③

—前号までのあらずじ—
若者は、歳ははたち、北陸は能登か。

松前辺りの昆布を博多に卸し、唐津で焼物を積むはずであった。時は春、ひどい嵐となり、能古の沖で若者が乗っていた廻船は取え無く遭難。翌朝、若者は浜に倒れていた。

おさよは、一睡もせず若者の介抱を続けた。若者はせめてものお札にと、今まで渡り歩いてきた諸国の話を聞かせた。その能登訛りの誠実な語り口がおさよの心を捕らえた。

時はうつろい、麦の実る頃となった。若者は船に乗って帰るにはまだ無理であった。また、このまま世話になりつばなしでは、去るに忍びず、それに親兄弟が居るわけでもないことだし、せめて二・三年位はお礼奉公をと、おさよの父親、庄屋に頼む。

謙虚さと、分をわきまえた若者は実によく働いた。

日毎に体力は回復し、そのたくましさは、島の娘たちを魅了するに充分であった。

たわわな稲の刈り取りが済んだ頃のこと。おさよは、若者に胸の内を明かすが、ひたすらおさよに任せようとする若者の態度は容易には変わらなかった。

おさよは父・庄屋にも頼むが、その頃、よそ者と結ばれるなど絶対に許されない島の掟があった。おさよのあまりの熱意に庄屋はついに、親子の縁を断つことを条件に許してしまった。

おさよは若者を見つめ、喜びの涙があふれる。若者は静かに答えた。「お嬢様は、どんなことがあってもお守りいたします」

二人が人々に祝福もされずに能古を去ったのは師走の初めのころであった。庄屋は若者をそつと呼んで、二・三年の間食うに困らないだけの金を与えようとしたが、若者はそれを断り、今までの好意を謝し、小舟を操って暗闇の中に消えて行った。最も愛する者同士の、最も信頼する者同士の、生きて会う最後の時であった。空には星が、海には夜光虫が光り、二人の小舟を飾った。

二人は博多の町の片隅に新居を持った。若者は魚の触れ売りなどをして働き、おさよは近所の人の着物を

能古博物館だより

縫ったりして生計を立てた。二人の仲の良さは近くの人々のうわさの種類となり、子を持つ親たちは、「どこから流れてきた者かは知らないが、うちの子も、あのような夫婦になつてほしい」とさえ思うようになった。

若者は、風の便りに聞く能古の話をおさよに伝え、特におさよの父親の庄屋の話を耳にしたときなどは、商売も八分方で終えて帰って来るのであった。

「こと様がの、千石船を作りなされたそうじゃ。りつばな船じゃとみんながうわさをしとつたぞ。わしらも、影ながらお祝いをしてさしあげようぞ」
おさよはうれしそうに笑い、一本の酒を二本にして若者の気持ちに答えた。

そういつた二人にとつて、ただひとつ悲しいことは子どもができないことであつた。特に若者は、ひとり暮らしの庄屋様に、せめて、立派な子どもを生み、育て、親不孝の自分たちかわりにお返ししたいと思つてはいたのだが、何年たつても子どもはできなかった。

さらに何年かが過ぎ、若者は商売の帰り道で庄屋様が世を去つたこと

を聞いた。若者は遠く能古の島が見える箱崎の浜に出て、ひとり涙した。その夜、おさよは初めて不機嫌で物言わぬ夫を見た。

そのころからである。おさよが目

を患い始めたのは。初めは、なんでもなかつた目葉

などをさしていたのだが、やがて目

医者にかからなければならなくなり、

若者の必死の看病の甲斐もなくおさよはついに盲となつた。

にわか盲の悲しさが常におさよの心を襲つた。若者がどんなに慰め、どんなに心をひき立てようとして

も、それは無駄な努力であつた。お

さよには若者が作つてくれる味噌汁

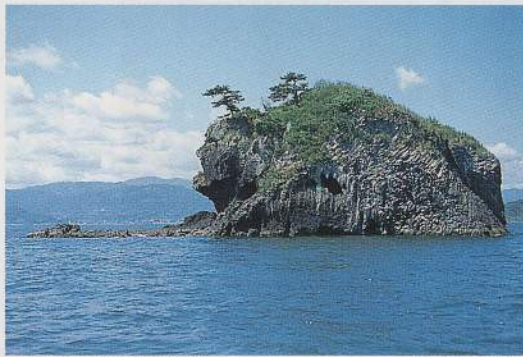
や焼き魚の、そのひとつひとつが嬉しゅうて悲しいのである。夫にすまない、だから今日は笑顔を見せよう

と思うのだが、それができない。たまに訪れてくる人の目には、そうい

うおさよの姿が以前にも増して美し

いものとして映つた。ある日、おさよは若者に言った。「お願いですから、能古の島に連れて行つてください」

若者は、他の所ならともかく、能古の島だけはいけない。庄屋様との約束はどんなことがあつても守りたいと言つた。その夜は無言の夜であつた。



杉山謙氏撮影

能古島から眺めた ぞう瀬

「お願いですから、能古の島に連れて行つてください」

若者は、他の所ならともかく、能古の島だけはいけない。庄屋様との約束はどんなことがあつても守りたいと言つた。その

夜は無言の夜であつた。

「能古の島がだめなら、ぞう瀬に連れて行つてくださ

い」

若者は、海は体に悪いからと渋つたが、ついに負けて、それならば明日にでもというこ

とになつてしまつた。何やかと忙し

いままに日が暮れて夜となつた。考

えてみれば能古の島を去つてから十

年目の、しかも今夜は七夕の夜である。障子を開けると星が美しい。二人は何か月ぶりの楽しい語らいの夜

を過ごした。

十年前の、若者が流れた日の

こと。二人が恋を語つた日々のこと。二人で能古を去つた日のこと。そして、おさよにとつてはまだ元気でいるはずの父親のことなど、……能古の風物は二人の心に昨日見たもののように鮮明に映つていた。

すばらしい朝であつた。若者はおさよの髪を結つてやり、おさよは口に紅をさした。弁当も作り終え、外に出ると、久しぶりの太陽をまぶしいとおさよが笑う。もう若人ではないはずの二人は、若人のようにしつかりと手を握り合つて浜へと向かつた。

小舟の上はさらに楽しかつた。若者は、あたりの景色を説明してやりながら、あの佐渡おけきなどを唄つてやつたりもした。海の朝風がさわやかに二人の上を舞つた。
小舟がぞう瀬に着いたときのおさよの喜びようは大変なものであつた。「能古の島のおいがする」「能古の島のおいがする」
紺碧の海は藻をゆらし、魚を泳がせて輝いている。若者はその海に海士のように潜つては、さざえやあわびを取り、それをおさよの掌に乗せた。おさよは子どものように喜び、話はまだ昔語りになるのであつた。(了)

亀井家学を支えた女たち(1)

昭陽妻 イチ 上

早船正夫

(福岡地方史研究会会員)

◆「筑前亀井学」

南冥、昭陽、陽洲、玄谷の四代。これに南冥の弟曇榮、昭陽の弟大壮、大年そして昭陽の娘少葉。家門あげて儒学の講究に従事した。まさに家学である。

しかし江戸封建時代といえども、家学の維持は男の学者だけでは成り立たない。これを支えた女たちがいた。史料のはっきりした昭陽妻イチとその長女少葉の二人について考えてみたい。

◆新妻への内訓九章

「父母の命があつたので早船氏即ちそなたを娶つた。既に祖先への報告拜礼も、冠婚の儀礼も終わつた。そこでそなたに内訓九章、即ち本書を授け、私の意中と希望を告げたいと思う。」昭陽はこう内訓を書き出している。

内訓とは「女性に対する教え」を

行われていたらしい。昭陽もこれを踏襲したのである。

この時新郎

昭陽は二十三

才、新婦イチ

は十九才であ

る。寛政七年、

十二月十五日

(二七九五年)

の事であつた。

総字数約二千

四百の格調正

しい漢文は新

妻一人のためだけにあてた著作といえる。

続けて、昭陽は父南冥の業を受け継いで、これを立派になし遂げたい志を述べ、そのために、「令徳の女子を得て、己の足らざるを補はん。」と新妻の尽力を求める。そして昭陽は妻イチの性格・教養・躰けについて忘憚のない直言を新妻にぶつける

文書にして相手

に与えるもので、

中国の後漢の時

代にその事例が

あるが、遙か後

世わが国、江戸

時代に於いても

儒学者の一部で

ある。

のである。

「そなたの才は不可であるが、それは天の命で今さら仕方ない。そなたが心掛けによつて改め得る事柄について、今、教える所あり。そなたは西の方ひなびた野に生まれ、草ぶかい田舎に成長した。恐らくは、婉婉聴従の教。すなわち淑やかして穏やか、目上の人の言うことを聴き従うような躰けを身につけてはいまい。

洗練されても

いまい。昔は

妻を娶つて、

妻の足らざる

点は真実を、

言葉を隠す所

なく、直信以

て妻に告げた。

だから私は訓

を審らかにし

て、そなたに

命じる。」

かくて、妻イチに妻としての心掛け、要望、守るべき事柄を九章としてあげた。これは当時代一般に考えられていた妻の理想像でもあろうが、儒学者一門として、更に厳格に実行を求める昭陽の意気込みが、全編に溢れている。

◆従兄妹どうしの縁組

それにしても、である。意気込みは理解できるとしても、新妻に対して厳し過ぎるのではないか。現代の眼でみれば、そういわざるをえないであろう。現在そう言い渡された新婦の十中八九は、直ちに離婚を申し出るかも知れない。そのような女性差別の観点からの歴史評論や随筆も出されている。

しかし——イチは内訓そのままを厳格に実行するよう求められたのはなさそうである。当時としての通常の家庭生活が、おだやかに待っていたと、私はみている。

この夫婦は従兄妹どうしの縁組であつた。即ちイチは南冥の姉モトの末娘である。

南冥の父聴因は怡土郡三雲から姪浜浦に出て医業を始めたが、その医家の近く約百米に五島屋(早船氏)という浦商家があつた。

当主の長男正朔に、聴因の娘モトが嫁し、イチを含む一男三女をもうけた。後聴因は南冥とともに、唐人町に屋敷地を購入して、そこに移転した。ということはイチにとつて亀井家は母の実家でもあり、また自分の嫁ぎ先でもある。イチは幼時より、しばしば遊びに往来したことである



【参考】荒木見悟著 亀井南冥・昭陽文獻「巻末付録」内訓

う。イチは、嫁ぎ先の家族の
だれからも親しまれ、かわい
がられていたと思われる。

また昭陽との年齢の差は
四。昭陽自身の情感も「父母
の命によって」娶っただけで
なく、ある程度成熟していた
とみてよいだろう。

ただ、儒学者の内室なるも
のを、先輩から多く見聞し、
内心その理想像を描いていた
昭陽にとって、豊かな環境に
育ったとはいえ、浦商人出自
の娘には、多少の違和感に心
が騒ぐ時もあったろう。

特に「浦」の者に通有の開
けっ広げの性分は、学者の妻
として甚だ困る。早々に「婉
婉聴従の教」に馴れ親しんで
もらわなくては。これが内訓
九章執筆の機縁ではなかった
かと思う。

それから四十一年間、昭陽
につれそつたイチは、夫と亀
井家の暮らしをどう支え、そ
して自分はどのように生きて
いったか。

(次号続く)

第三回能古の風
フォトコンクール
応募開始
平成12年9月30日まで



第二回能古の風
フォトコンクール入選
「嬉しいのとき」永石順洋氏

昨年の「第2回能古の風フォトコンクール」は一昨年以上に作品も集まり能古島らしさを感じさせる作品が多く、入選者を選ぶのが大変でもあり嬉しくもありました。今年もぜひ御応募をお願い致します。

テーマ 「能古の風」(能古島に係る人・物・自然等制限なし)

サイズ 白黒 カラーとも4ツ切(ワイド4ツ切可) 組写真不可

賞
グランプリ 1点 50,000円・賞状
準グランプリ 1点 30,000円・賞状
特別賞 1点 20,000円・賞状
入選 7点 10,000円・賞状

その他 ●全作品を平成12年10月9日(月)より11月30日(木)迄当館にて展示。
●作品は未発表及び発表予定のないものに限る。
●住所・氏名・電話番号・題名(ふりがな)を明記した紙を裏面に貼付。
●入選以上は原版提出。
●作品はすべて返却しない。

表彰式 平成12年10月14日(土) 11時～

送り先 〒819-0012

問合せ 福岡市西区能古522-2 (財)能古博物館 ☎(092)883-2887
「第3回能古の風フォトコンクール」係

締切 平成12年9月30日

発表 平成12年10月上旬 入選者のみ直接ご通知
(今回の分より入選者の皆様のお名前を次号の「能古博物館だより」に掲載させていただきます)

